

田中水門・[渡し場]と「せんだん」の樹

◎ 田中水門のこと

田中野田の区画整理事業で、「御南中」北の古い方の田中水門が平成2年全面的に改築された。新しい水門は鉄筋コンクリート造りで、間口も4.2mと以前より2倍以上大きくなつた。また、門扉の開閉も電動式で全て近代化されたわけである。しかし、ここで改築される前の古い田中水門についてふれ、考えてみることにする。

この古い水門も、明治45年に改築されている。そして、水門の大きさは、間口1.4m・高さ1.2m・奥行き12mであり、基礎には3mくらいの松杭が打たれていたそうであるが、構造部本体は、全て石造りであった。しかも、大きな石を使ってのこと、その量も護岸に用いられたものを除いた本体部分だけで60トン(米で1000俵くらい)以上と私は推定するのである。

ところで、このような大量の石を、どこからどのようにして運んだのであろうか。陸路の運搬では、当時の周辺の道路事情等を考えると不可能である。したがって、瀬戸内海諸島のどこかで切り出された花崗岩を海から筏が瀬川をさかのぼって運ばれたに違いないかと思う。

では、大きな石をどのようにして？ 市役所の専門技術職の方の話ですと、戦前の例では下図のように2艘の小舟の間に石を水中につるし(石も軽くなる)、上潮を利用して(当時は筏が瀬川も潮の干満があった)運び、引き潮に現場の浅瀬に沈着さす方法がとられていたそうである。



田中水門の工事の場合も、このような方法で石が運ばれたのではないだろうか。それにしても、今のような機材のなかつた当時としては、大変な作業であり大事業であったろうと思うのである。

なお、この水門の礎石の一つに当時の人の

岡田平左エ門	和氣善次郎	藤原源次	波多野注左エ門
--------	-------	------	---------

名前が左のように刻まれていた。善次郎さんは土地の人で、和氣輝明さんの4代前にあたる方だが、その他の人の名前は知られていない。また役割もよく分からぬ。

◎ 「せんだん」の樹と[渡し場]

水門の出口の北、現在ゴミ置場になっているところに、昔は大きな「せんだん」の樹があった。自然に生えたものか、特別に植えたものかよく分からぬ。私が子どもの頃、夏には、川辺で緑陰のあるここが恰好の遊び場であった。

また、ここが「渡し場」と言われ、対岸の今保へはここから舟で往来した。ただし、舟の出入りが定期的にあったわけではなく、地元の人の依頼で、臨時にその都度、白石末広さんの先代の方がサービスで舟を出してくださっていたのである。私も子どものとき、親類へ行くのに何回か利用させてもらった。

「せんだん」の樹は、昭和7年から始まった笠ヶ瀬川改修工事でなくなった。(いまは、この附近では、中銀問屋町支店の東北隅に植わっているのが見られ、懐かしい思いをしている。)

「渡し」の利用も、大正末頃からの自転車の普及に伴い自然に止んでしまった。また、戦後「御南中」西へ通学路もできた。しかし、今でも土地の人から白石さん宅を、「渡し場」と言う代名詞で呼んでいるのは、往時の名残である。

付記 平成2年2月改築「田中水門」の概要

構 造 間口 4.2m 高さ 1.9m 奥行 12m 鉄筋コンクリート造り

総工費 2600万円



旧水門(バックは御南中学校校舎)

平成4年10月号 第24号

(中尾 佐之吉)